

るが、附属学校は教職課程をもつ大学に対する責任の重要性を自認するならば、協力校との連絡・協議などを行って、教育実習を充実改善するための検討を契機

として、附属学校自体、ひいて大学・学部のあり方の研究を推進すべきであろう。

〔IV〕 「現下中等教育の課題」

近 藤 貞 次

(昭和28年4月～同31年3月学校長在任)

知育・徳育・体育の三位一体の教育が中等教育のあり方についての最も望ましい姿の一つであると信じている。この考えはわたくしが名古屋大学教育学部附属学校の校長時代わたくしのモットーとしていたものであり、今でもその考えに変わりはない。わたくしの朝礼の際の話は高邁な抽象的な話しではなくて卑近な話しであった。出来ない生徒に喜ばれる話しが多かったように思う。ある家庭である生徒がきょうだいから出来が悪いと笑われると、わたくしの話しを引き合いに出して、出来ないことは笑うべきことでも、大切なことでもない、大切なことはうまずに努力するかしないかである、と反論したという。わたくしの校長時代生徒間の人間関係は非常によかった。うちの子どもがよい友達にめぐまれたのはわたくしの指導がよかった為であると喜んで下さった家庭もあったが、特に受験勉強を強制しないわたくしのやり方に対し不満の人もあったという。あんな学校にうちの子供を預けて

おいたのでは上級学校へ進ませることができないというので、中学校のみで名大附属に見切りをつけて他の学校に移った人もあったと聞いている。わたくしは生徒に全生徒が超一流の人物になることを期待していないと言ったことがある。一人でも多く一隅を照らしていることに誇りを持つ人を出ることを期待していると言ったこともある。生存競争に打ちかって生き残った人の中には人をけ落すことしか考えていない人もわたくしは知っている。価値観の相違であると言えばそれまでであるが、わたくしにはそういう人生の歩き方を軽べつせざるを得ない。

「現下中等教育の課題」といっても、わたくしの考えでは、知育・徳育・体育の三位一体の教育を如何に分りやすく、日常生活に実践し得るように教え込むことができるかということにある。表現は少し変わったかも知れないが、考え方は附属の校長時代から少しも変わっていない。

〔V〕 新たな現実、複雑な課題

広 岡 亮 蔵

(昭和34年4月～同37年3月学校長在任)

現実と体制とのズレ

わが国の学校体系を見渡すときに、高等学校の教育すなわち後期中等教育は、いちばん深刻な問題をかかえて、混迷を重ねているのではなからうか。

“中学卒業だけでは話にならない、せめて高校ぐらいは卒業しなければ、”との高学歴志向の風潮が強力な動機となって、誰もかれもが高校へ進学するように

なってきた。全国平均で約93%の高校進学率だということだから、実質的にはほとんど高校全入が実現したことになる。

こうなると、当然のことながら、きわめてさまざまな若者たちが高校にはいってくることになる。関心もいろいろ、能力もまちまち、特性もさまざま。これらの多様さの今日的な状況は、かならずしも正常分布の多様さだということができない。というのは、中学生